

地球地図フォーラムの挑戦

梶 秀樹

国連地域開発センター (UNCRD) 所長



1997年11月12日～14日まで岐阜県図書館で開催される”地球地図フォーラム”を日本国建設省国土地理院と共催することは、国連地域開発センター (UNCRD) にとって大きな喜びです。

UNCRDは1971年の設立以来、地域開発に携わる発展途上国の政府職員の能力向上のために、人材育成のための訓練コースの運営や、問題点を見極め、政策の勧告を行うための共同研究活動の実施を通してあらゆる努力をしております。

しかし、残念なことには、データの不足は、常に、発展途上国での適切な地域開発計画を作成する際に大きな障害となります。そのなかで、地域の正確な地図の不足は、重大で本質的な問題です。場合により、地域の地図は、一国の防衛のための戦略的な道具とみなされ、そのため機密文書として扱われます。このような考えは、リモートセンシングの技術が、10メートル四方の解像度で非常に正確な地球表面の画像を提供できる近年、全く意味を持たなくなっています。それにもかかわらず、発展途上国では多くの場合に、単に高い費用のために地図を作成する余裕が無いという理由だけで、適切な紙地図が入手できません。実際に、外国の開発援助プログラムが発展途上国でこうした地図の作成プロジェクトを行うときに、基本図作成には多大な時間と費用を必要とします。

この点で、日本国建設省国土地理院が手がける地球地図構想は、世界や、ことに発展途上国に対して、素晴らしい貢献であると高く評価されます。冷戦が終わり、国際社会は世界経済と貿易という点ばかりでなく、環境面の介在においても、いわゆる“境界のない”関係の構築に向かって加速しています。将来、一国の問題は、その国の努力だけでは解決されなくなり、その近隣諸国の協力や、むしろ国際社会全体の協力によって解決されるでしょう。国際社会のこれらの将来の変化を考えると、地球地図構想の影響力が容易に認められるでしょう。

発展途上国の地域開発を専門に行う機関として、また、そのプログラムに地球地図のデータを利用する利用者として、国連地域開発センターは、この重要な“地球地図フォーラム”を共催することに非常に大きな興味を持ち、来るべき時代への貴重な貢献としてのその討議の成果に期待します。

地球地図フォーラム’97 in岐阜

11月12日～14に岐阜県図書館で行われる「地球地図フォーラム’97 in岐阜」まで、50日足らず

となりました。プログラム概略は、現在のところ以下の通りです。

フォーラムの初日には、地球地図の利用者からの報告があります。同日の3時30分から、特別セッションが予定され、国連の高官や、建設技監、岐阜県副知事、中央環境審議会会長が“意思決定のための地理情報”というテーマで発表を行います。

第2日には、地図作成者側からの参加者が、国家及び地域空間データ基盤や地球地図プロジェクトへの連携、地球地図整備に直接関わる問題等について発表を行います。これらの発表やそれに続く討議は、地球地図仕様や整備のための戦略計画がまとめられる予定の第3回地球地図国際運営委員会会合への重要な情報源となることが期待されます。

登録を見ると、オーストラリア、カナダ、中国、ガーナ、フィンランド、イラン、マレーシア、ニジェール、ロシア、ウガンダ、米国、日本等多くの国々から多数の方々がフォーラムへ参加する意向をすでに表明しています。フォーラムの最終的な案内状とプログラム（案）が10月中旬に登録者に送られる予定です。秋の紅葉のなか、フォーラムでお会いしましょう。

詳しくは、地球地図国際運営委員会事務局と同じ場所のフォーラム事務局までお問い合わせ下さい。

地球地図サミット+5と+10に向けた地球地図



地球サミット+5と呼ばれる第19回国連特別総会は、1997年6月23日～27日までニューヨークの国連本部で成功裡に行われました。地球サミット+5には、58ヶ国の代表が参加しました。

地球サミット+5には、19の文書が提出され、米国と日本の共同提案の地球地図セミナーの要約も、これらの文書のひとつとして配布されました。（地球地図ニューズレター第6号で既報のとおりです。）

地球地図関連の項目は、地球サミット+5の最終文書の“アジェンダ21のさらなる実行を図るためのプログラム”に以下の通り盛り込まれることが受け入れられました。

セクションC. 早急な対応が必要な分野における実行

3. 実行手段

パラグラフ112. (仮訳)

一般の人々が、地球環境に関する高度な情報通信基盤などの適切な手段を通して、地球環境問題に関する情報を自由に利用できるようにするため、とりわけ途上国において国家の情報収集・処理・普及能力を高めるための支援環境を確立する必要がある。この際、各国固有の状況を考慮し、利用可能であればビデオ伝送技術や地球地図を含む地理情報システムなどのツールを用いていく。この点に関して国際協力は不可欠である。

国家地図作成機関がアジェンダ21の実行への重要な貢献を行うために、この“プログラム”の支援に

より西暦2000年までに地球地図の第1版を整備することは重要です。

エグゼクティブ・サマリーの全文書とプログラムは以下に示す国連のホームページからダウンロードすることができます。

gopher://gopher.un.org:70/00/ga/docs/S-19/plenary/ES5.TXT

gopher://gopher.on.org/11/ga/docs/S-19/plenary

地球地図技術仕様の草案作成作業が進行中

地球地図の技術仕様（案）は、今年11月に開催の地球地図フォーラムで発表するために、地球地図国際運営委員会の職員の間で現在最終的な検討が行われています。ニューズレターの本号が発行されたら、地球地図国際運営委員会のテクニカル・ワーキンググループの委員の間で、仕様（案）についてインターネットを経由して活発に討議が行われることを期待します。現段階で、私たち地球地図国際運営委員会の事務局員は、以下の点に注意を払い現在本仕様（案）の草案を作成しています。

1. 仕様をできるだけ簡単にする
2. 既存の技術的標準を利用し、できる限りそれらと一貫性のある仕様とする
3. 仕様を既存の標準とできる限り一貫性のあるものにする
4. 仕様には、共通の対象物のみを取り入れる

地球地図は、以下の6つのテーマから成り立ち、9つのレイヤーに分けられます。

1. 標高
2. 土地利用
3. 植生
- 4-1. 水文（河川）
- 4-2. 水文（湖）
- 5-1. 交通（一般道）
- 5-2. 交通（ハイウェイ）
- 5-3. 交通（鉄道）
6. 行政界

上記の1～3までのレイヤーは、ラスター形式で描写されます。その他のレイヤーは、ベクター形式で描写されます。仕様の内容は以下のとおりです。

1. ベクター形式とラスター形式の両方で描かれるデータのための共通の仕様

2. ベクター形式で描写されるデータのための仕様
3. ラスター形式で描写されるデータのための仕様
4. データの内容
5. メタデータの仕様

私たちは、第3回地球地図国際運営委員会で最終的に決定するために、ワーキンググループでの討議やフォーラムでの発表を通してより良くするよう本仕様（案）作成作業を続けています。

環境地図研修コースの報告

国際協力事業団(JICA)の研修コースの“環境地図集団研修コース”は、1997年5月26日から8月8日まで国土地理院において、バングラデシュ、中国、マレーシア、フィリピン、タンザニアからの5名の研修員が参加して行われました。

本コースの目的は、リモートセンシング技術や地理情報システムについての講義や、既存の数値標高モデルの標高値と地形図の等高線から読み取った標高値との間での精度評価に関する課題研究などを通して、研修員に地球地図構想についての理解を深める機会を与えることです。

本号の以下の記事は、本コースにマレーシアから参加した研修員のハッシム・ビン・バルディン氏から寄稿されました。

日本国国土地理院(GSI)が行う環境地図コースは、私が現在までに参加した中で最も興味のあるコースのひとつです。このコースは、環境目的のための地球地図について、情報や知識を提供するために計画されました。また、コース参加の研修員が地球温暖化、オゾン層の減少、温室効果ガスの放出など、現在の地球規模の問題についての環境への関心を高めることとなります。10週間という期間は短いと思いますが、研修員全員にとって、非常に有益で、役に立つ意味のある研修でした。

本研修は、一連の講義、関連機関の見学、現地調査などでよくまとめられていました。講義の課題は、地図作成や環境問題について注意深く選ばれていました。講師は国内の幾つかの大学や研究機関、国土地理院自体から招聘されていました。招聘された講師の何人かは、環境研究の専門家でした。見学の際には、研修員は専門家や研究者から、じかに得た情報や環境問題の現状について紹介がありました。日本の何カ所かを訪れた現地調査では、日本政府の環境や天然資源の保護の状態について、環境への配慮を知ることができました。

この機会に、国土地理院の環境地図コースの運営の努力と成功を祝い、環境計画作成の向上のために西暦2000年までに最初の地球地図を目の当たりにすることを希望します。

ハッシム・ビン・バルディン

マレーシア研修員

1997年環境地図コース
